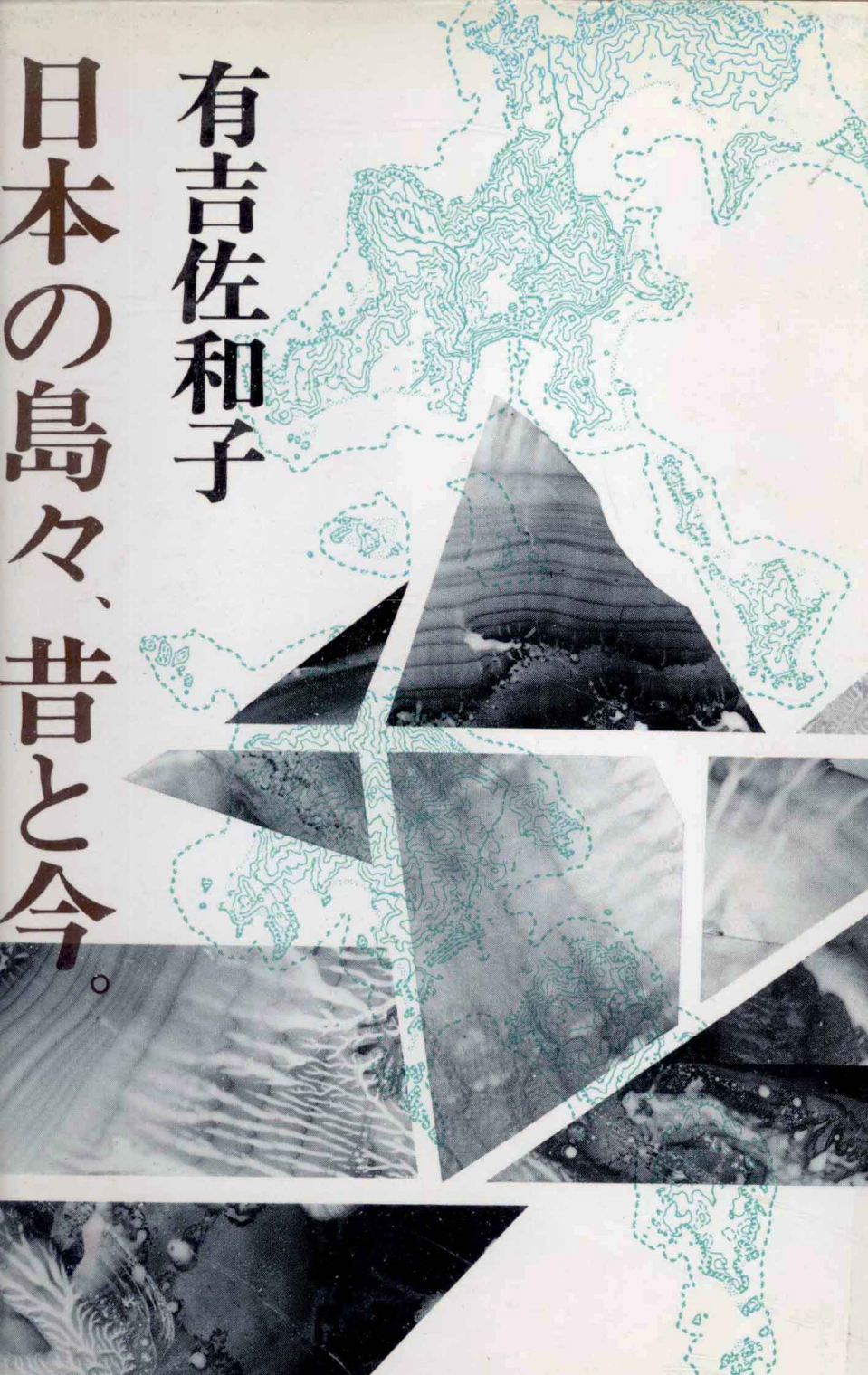
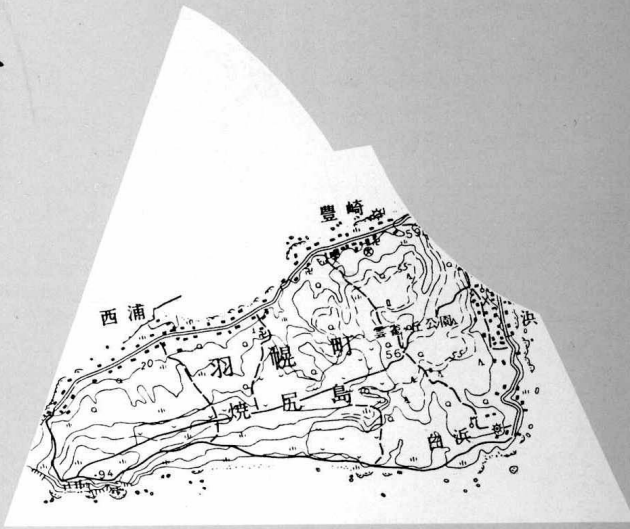
日本の島々、昔と今。

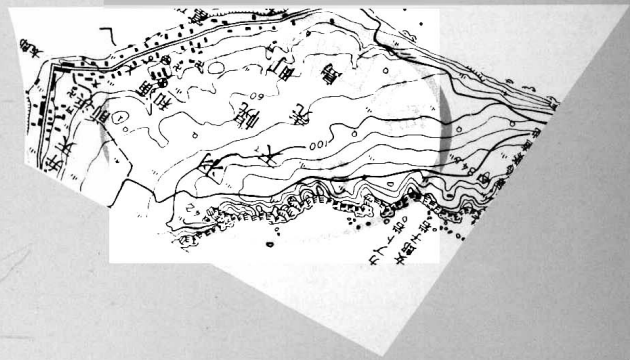
有吉佐和子



有吉佐和子

日本の島々、昔と今。





日本の島々、昔と今。
一九八一年四月一五日　第一刷印刷
一九八一年四月三〇日　第一刷発行
定　価　一二〇〇円
著　者　有吉佐和子
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五　一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部　二三〇　六三六一
販売部　二三八―二七八一
印刷所　大日本印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1981 S. ARIYOSHI, Printed in Japan
0095-772315-3041

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

日本の島々、昔と今。

目次

海は国境になった（その一）……焼尻島・天売島　五
鉄砲とロケットの間に（その二）……種子島　三五
二十日は山に五日は海に（その三）……屋久島　五七
遣唐使から養殖漁業まで（その四）……福江島　八一
元寇から韓国船まで（その五）……対馬　一〇三
南の果て（その六）……波照間島　一四一

西の果て、台湾が見える（その七）……与那国島（よなぐにじま）　一六五
潮目の中で（その八）……隠岐（おき）　一九九
日韓の波浪（番外の一）……竹島（たけしま）　二三三
遥か太平洋上に（その九）……父島（ちちじま）　二五九
北方の激浪に揺れる島々（番外の二）……択捉（エトロフ）・国後（クナシリ）・色丹（シコタン）・歯舞（ハボマイ）　二八九
そこに石油があるからだ！（番外の三）……尖閣列島（せんかくれっとう）　三三五

装丁・有吉　徹

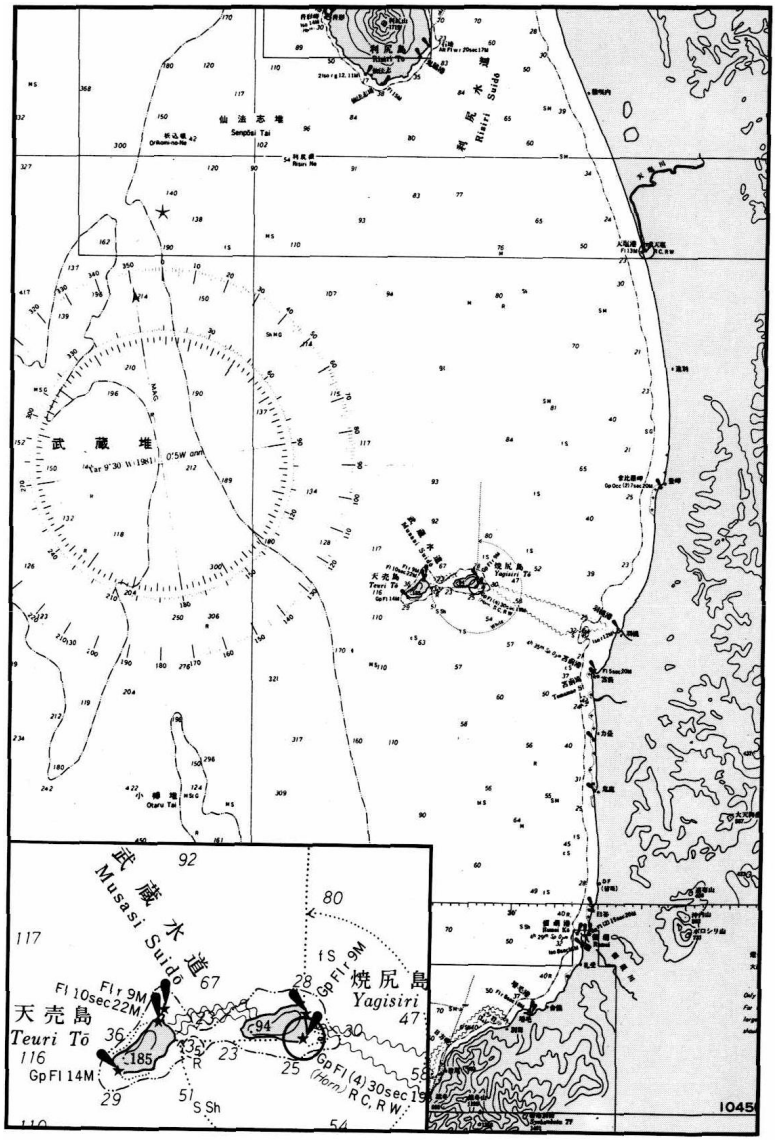
◇この作品は『すばる』（昭和五十五年一月号―昭和五十六年一月号）に十三回にわたって連載されました。

◇本文中使用の海図は、水路図誌複製海上保安庁承認第五六〇〇〇五号の許可による図の部分です。

海は国境になった——焼尻島(やぎしりとう)・天売島(てうりとう)

日本の島々、昔と今。その一

（昭和五十四年十一月十六日脱稿）


利尻島
Risiri To
利尻水道
Risiri Suido
仙法志堆
Sempôsi Tai
武蔵堆
Musasi Tai
小樽堆
Otaru Tai
天売島
Teuri To
焼尻島
Yagisiri To
武蔵水道
Musasi Suido
焼尻島
Yagisiri
天売島
Teuri Tô
Fl r 9M
Fl 10sec 22M
GpFl 14M
Gp Fl r 9M
Gp Fl (4) 30sec 15M
(Horn) R C, R W
S Sh
1045

北海道出身の人でも「え、ヤギシリ？　テウリ？　なんですか。島？　さあ、そんな島、北海道にあったかしら」と言う人が多い。離島専門家と呼べる宮本常一氏の著書を見ても、上陸したことはあるが泊っていない。よしよし、それなら私が出かけて行こうという気になった。日本中がレジャーブームで、どこへ行っても観光客だらけという時代である。ことに私が出かけたのは一九七九年八月上旬という観光シーズンであった。

羽田空港から満員のジャンボ・ジェットに乗って千歳空港へ。そこからバスで札幌駅に行き、汽車に乗る。留萌本線から昭和七年に開通したという羽幌線に入って、ゴットン、ゴットンと揺られて五時間、ようやく北海道苫前郡羽幌町に着く。二つの島影は早くも汽車の中から眺めることが出来た。大きな島に思えた。私は二十数年前から離島に関心を持ち続けていて、鹿児島県の黒島や、伊豆七島の御蔵島などを舞台にした小説を書いている。外国ではプエルトリコ島を、やはり小説で扱っている。それでも、汽車の窓から見える島というのはこれが初めてなので、いささか興奮した。どんな島なのだろうと好奇心が噴き出てくる。旅へ出るとき、私は決して前以て本を読んだりして下準備しておくことをしない。白紙の状態で飛込む方が、偏見を持つことなく、新鮮にその土地を感じることができるからで、このときも宮本常一氏が泊られたかどうかを調べただけに止めていた。氏は十五年前に上陸し、慌しく調査して帰っているのだし、十五年の間には日本も大変貌しているように、島の変化も大きいだろう。私は自分の眼と耳で、しっかり二つの島をとらえたいと思っていた。

夕方着いた羽幌町に一泊する。島までは六百人乗りの汽船が日に三往復している季節であったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

何分にも東京からでは汽車の旅がいかにもさいはてという感じで、その日のうちに島に着くことは出来ない。町役場の観光課に推薦してもらっていた駅前旅館に上ったが、おそろしいほどうらぶれた宿なので、いよいよ明日は四級僻地に行くのだと武者震いがしてくる。観光課が、町役場では水産課と兼ねているのが面白い。しかし役場もすでに閉っている時間なので、夕刻は埠頭までランニングをして汗を流す。東京から来るとやはり涼しくていい気持だった。

ハボロは北海道奥地の様子がようやく徳川幕府に分明になる寛文年間（一六六〇年代）には砂金の産地として知られていたところである。元禄年間（一六九〇年代）には松前藩が砂金奉行を置き、さかんに採掘していた。しかし砂金が間もなく取り尽されると、ルモイやトママエが鮭（さけ）、鱒（ます）漁が盛んになっても、ここはただ出稼ぎ番屋があるだけで、住んでいたのは渡守りのアイヌが一戸という淋しさが長く続いていた。この町が賑わい出したのは、昭和七年に炭鉱が開発されてからであるが、今は石炭山は日本中どこも閉鎖されている石油の時代だから、羽幌町に活気がないのは無理もない。

翌朝、いきなり町役場の水産観光課を訪ねる。私が行くと言っておかなかったから「小説など書いている有吉佐和子という者ですが」と名乗っても、私のものなど読んだこともない方々が、半ば茫然として応対して下さる。しかし思いがけず「羽幌町史」というのが北海道大学名誉教授、高倉新一郎先生の序文つきで、羽幌出身で史学を専攻された関秀志氏の手で立派に編集され、十三年も前に出版されていた。全八〇〇ページという見事な本である。これは本当に有難かった。

それを拝借して第一天羽（てんば）丸という船に乗る。しかしながら、船の中には蟹族たちが一杯いた。つい先刻、水産観光課で年間五万人の観光客が島に押寄せると聞いて私はがっかりしたのだ。海は鏡のように平らで、天羽丸は揺れず、舳先に立って海風を浴びている私は次第に勇気を取戻していた。

焼尻島には、たった五十五分で到着してしまった。こんなに早く着いても四級僻地なのかと私は

驚いてしまう。立派な港湾施設があり、船は波止場に横づけになる。私はただただ驚いていた。二十五年前の黒島ではもちろん、十余年前の御蔵島でも、私が出かけたとき船は沖合で錨をおろし、小さな艀舟で波しぶきに濡れて上陸したものだった。波止場には旅館の名を大書したものを掲げて十数人が出迎えていた。民宿もふくめると三十軒以上の施設があるのだ。その中から、私が泊ることになっていた旅館名を見つけ、下船してこちらから近寄り「お世話になります、よろしく」と挨拶すると、不思議そうにまじまじと見て「ああ、そうですか」と言ったまま、まだ船の方を眺めている。他にも客があるらしい。が、ややあって、彼は私の荷物を持ち、すぐ目の前のミニ・バスに載せてから言った。

「さあ乗って下さい」

「あのォ、他にもお客さんがあるんじゃないんですか」

「ええ来る筈だったんですが、午後の船なんでしょう。お客さんは、どこから来られましたか」

「東京からですけど」

「ああ、そうですか」

やっぱり暢気なものだと感心しながら、船より揺れる車で、あっという間に宿に着く。

「ここは白浜海岸の近くですか」

「ええ、この島ではうちが一番白浜に近いんですよ。歩いて、すぐですから」

ところで出迎えた宿の主人もまた、

「はあ、東京からですか。予約してますか」

と、玄関で妙な顔をするのである。

「あのォ、東京から、電話かけましたけど。町役場の水産観光課から、旅館の名も電話番号も教え

て頂いて」
「うちには予約が入ってないんですけどねえ」
「それは変ですね、同じ名前の旅館が他にもあるのでしょうか」
「いや、そんなことはありません」
「あのォ、こちら満員なんですか？」
「部屋はありますけど、お高いですよ」
「いかほどでしょう」
東京のホテルの半値だった。しかも朝と夕二回の食事つきである。
「結構です。出来れば私には海の見える部屋をお願いしたいんですが」
「二号室へ入って下さい。海は見えます」
指さされた二号室なるものは床の間つきの八畳で、広縁に机とソファがあり、窓を開ければすぐ磯であった。
間もなく感じのいい若い娘さんが、お茶を持って入ってきて、宿泊者用の書込み票を私の目の前に置いた。住所、姓名、職業、年齢などを書いて渡す。やがて先刻の御主人が背広を一着して挨拶に来た。私にはペンネームがないので、いつもこういうことになってしまう。しかし偶然ながら、この方が島の観光組合の副会長をしておいでになることが分った。
島と本土（北海道）を結ぶ定期船は、昭和九年、石油発動機船「天羽丸」が、羽幌―焼尻、天売間を往復するようになった。翌年、苫前両島定期船株式会社が創立され、昭和十七年には資本金五万円で組織が強化され、名称も両島運輸株式会社と改められた。しかし羽幌と両島および苫前の三角航路が実現するのは昭和二十五年からである。

「昔は苫前から十四時間もかかって、大変でしたが、おかげさまで近頃は船も大型化されて、それでも五十五分もかかりますが、お客も昔のことを思えば一時は爆発的に殖えました。が、石油ショック以来横這いです。私の店も最初は島で獲れる新鮮な魚を鍋でわっと煮て、よそでは食べられないような旨いものを出せばいいだろうと、気楽に始めたものでしたが。旅館の前ですか、ニシンの漁をやっとりました。いや、親方じゃありません。ニシンが来ていた頃は、産卵期になると大変なものでしたが、ま、その話は詳しい人がいますから。役場からも電話が入りまして、後程うかがうということです」

「漁業組合は、どこにありますか」

「港のすぐ傍です。連絡しましょうか」

「いえいえ、私の方で出向きます。漁業に従事している人はどのくらいありますか」

「天売と違って、焼尻は少いですよ。天売にもいらっしゃるのですか。いらっしゃればすぐ分りますよ。この島とは何もかも違います」

「どう違うのですか」

「焼尻は、都会志向型とでも言いますか、若い者は島を出て行ってしまうのが多くて、高校も今年で廃校になりました。天売の方は若い人が島に残って親の後を継ぐのが多いのです。高校もありますし。まるで違っていますから、肌合が」

観光客の数は昭和三十二年頃には年に三千人だったのが、翌年は七千人になり、観光ブームにのって毎年増加していた。昭和三十九年、両島が「道立自然公園」に指定されてからブームに拍車がかかり、四十一年には二万人以上が押寄せている。

「島の人口は」

「八百そこそこですよ」

そこに今は五万人の観光客が押寄せる。さぞ大変だろうと思ったが、宿の主人は浮かない顔で、

「冬場は天羽丸も一日一往復ですし、客が来るのは六月七月に集中してますから」

と言った。

ヤギシリもテウリも日本語とは思えないが、アイヌ語としても諸説あって、シリは島の義らしいが、意味がどうもはっきりしないようである。焼尻の白浜地区と天売の三吉神社前に絡条帯圧痕文土器が発見されているから、島に人が住み始めるのは縄文時代早期あるいは前期と推定されている。紀元前約六〇〇〇年頃である。普通考えられるより早く人間が住みついたのは海の幸に恵まれていたからだろう。次の縄文中期のものでは南方系の円筒式土器や北方系の北筒式土器の両方が、どちらの島からも発見されている。およそ紀元前四、五〇〇〇年頃のものである。羽幌町史には詳しく写真入りで述べられてあるが、ここでは一気に江戸時代まで六千七百年ほど話を飛ばすことにする。

この地方の様子が記録の上で明らかになるのは十八世紀後半で、千島方面からロシア人の南下があったり、寛政元年（一七八九）に根室のアイヌが日本人数十人を殺害する事件が起きたり、同四年（一七九二）にはロシア使節ラックスマンが根室に来航して通商を求めるようになった。

徳川幕府はこの北方問題を重視して、北海道（えぞち）、千島、樺太（からふと）の調査・探検を行った。その結果、寛政十一年から文化四年（一七九九―一八〇七）の間に松前藩から北海道をすっかり取上げて幕領とし、警備とアイヌの保護に力を注ぐことになった。この幕領時代は文政四年（一八二一）まで続く。

文化四年の記録では焼尻はヤンゲシリと書かれ、「運上家、蔵七軒、惣夷六一人」とある。テウリ島は「番家、蔵一軒」とだけであった。

ところが北海道が再び松前藩支配に戻った文政四年の記録では「ヤンゲシリ、テヲレシリという

二島あり。苫前持ちにて無人島なり。テシオ川上の夷そのほか此辺の夷出漁をなして業とす。出産は鯡、鮑、煎海鼠などを産業す」と書かれている。夷というのはアイヌのことであろう。

安政二年（一八五五）また幕領となるのは、維新前の諸外国との交渉で、徳川幕府が緊張したからだと思われる。

島名物のオンコ林の傍に老人たちの「憩の家」というのが最近出来ていて、そこで故老からお話をうかがうことにした。島の面積は五・二五平方キロメートルだから、どこでも歩いて行くことが出来る。道路は綺麗に舗装されている。五万人の観光客で賑わうせいか、第三次離島振興対策実施地域に指定されていたからか。

「憩の家」は六十歳以上の老人たちの親睦のために作られたものであったが、東京ならどの町内にもある敬老会館と同じ内容だと思って頂けばいい。壁には会員の長寿番付が貼ってあり、横綱は九十二歳。七十七歳でも三役に入っていない。びっくりするほど高齢者が多い。

そこで八十二歳になる老人クラブ会長、布目さんという方から昔話を伺った。立派な体格、いい姿勢、六代目菊五郎のような顔だち。素晴らしい記憶力で、正確な年月日をつけてお話をして下さる。まず二十歳は若く見えた。

「この島は長生きする方が多いのですね、番付を見て驚きましたよ」

「みんな、うっかりして生きてますのでね。オンコ林だけで後は何もない。鰊が来た頃は三月四月は息つく暇もなく働きましたが、あとはうっかり生きていただけですから。魚は新鮮ですし、空気はいいし、だから長生きするんでしょう」

「鰊はいつから来なくなったんですか」

「昭和二十九年です。一匹も姿を見せなくなりました」

「昭和二十九年から今日までですか。二十五年も来ないのですか。どうしてですか」
「海水の温度が三度から六度上ったからだとか、海流が変ったのだとか、いろいろ言いますが、理由は今もって分らないのですよ。アリューシャン列島の方へ行ってしまいました」
「鰊漁場で栄えた島ですから、お困りになったでしょう」
「困りました。今でも困っています」
「鰊以外の魚はいるのでしょう」
「それはイカもヒラメもいますし、近頃はマグロの獲り方も覚えましたが、何しろあなたニシンとは漁獲量がまるで違いますから」
「ニシンが来た頃は、海にウヨウヨいたんですか」
「そんなものじゃないです。産卵期になるとニシンの大群が押寄せて、海がふくれ上るんだから。大したもんでしたよ」
「ニシンの産卵期って、いつですか」
「三月末から五月十日まで。毎年三月十日から、秋田県から人を傭ってね、膝折って借金して、用意するのさ。私の親は富山出身の漁師でタラ釣りやって、天売に住みついたのですが、人死が出たので焼尻に移りました。私と、息子と三代にわたって、天売にも焼尻にもお世話になってますのでね、島をなんとかせねばならんとこの年でも頑張っているわけでさ」
「ニシンの卵って、カズノコのことでしょう」
「ううん、そう、カズノコ」
「それをこの島の傍で産むんですか」
「島のぐるりの海草に産みつけるのさ。雌が上で泳いで、雄がその下泳いで、背ビレでチョコチョ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co